読んだ読んだ「盆土産」読み取りの足跡

一組　二場面

・　主人公は、父からいきなり来た知らせにびっくりしていた。しかし、父親が帰ってくると知ったときは、家族みんなで喜んだだろう。そして、「えびフライ」というものに、正体は分からなかったが、父が持ってくるものだから、家族はきっとおいしいものだと願っている。父のために雑魚を釣りにいったときには、「父にいいだしを」と思い、いつもは優しい主人公が、つい感情が表れて、どなってしまった。

馬場君

・　主人公は、速達で急に「盆には帰る」と知らせてきた父親に、いろんな思いを抱いた。もう少し早く伝えてほしかったし、えびフライとは何か？とか。でも、一番は、「うれしかった」。だから、釣りの最中、ばためく魚に思わず、愉快そうに、笑いながらどなってしまった。

近藤さん

☆　主人公は、見たことがない「えびフライ」というものに頭の中がいっぱいになっていた。いつもだったら来ないはずの速達が来たときは、不吉なものを感じてしまったけど、予想外だったから、びっくりと戸惑いの主人公だった。初めは河鹿をびっくりさせない優しい主人公だったけど、久しぶりに会う父親のために雑魚を釣らなければいけない思いと、河鹿を忘れるぐらいのうれしさでついどなってしまった。

武山さん

・　主人公は、速達が来たときに、工事現場で働いている父親にけがでもあったのかと思い、とても心配した。しかし、父親は、盆に休みが取れたため、早くそのことを姉や祖母、主人公に伝えるために、伝票のような紙切れをつかい、速達を選んだ。また、土産のえびフライに対して主人公は、「どのようなものか」と疑問を抱いていた。次の日、父親の生そばを作るため、釣りをしていると、釣りをしている人が少なく、大きな雑魚が掛かり、「ぴちぴち」とはねて、暴れたので、魚に対してどなってしまった。

小川さん

・　主人公は、父親の急な帰省の知らせに驚いた。それと同時に、土産のえびフライが気になってしかたがなかった。誰に聞いても分からないので、ますます気になるばかりだ。いつの間にか、くせの「えんび」を「えび」と普通に言えるようになっていた。父親の雑魚を捕っているとき、あまりに雑魚がはねるのを気にして、ついどなってしまった。

籔さん

・　主人公は、速達で来た封筒の中の手紙に不吉なものを感じていた。それは、穏やかな環境の中で「速達」というものになじみがなかったからである。でも、そこには、父親からの手紙が入っており、「盆には帰る。十一日の夜行に乗るすけ。土産は、えびフライ。油とソースを買っておけ。」という手紙が入っていた。主人公は、父親が帰ってくるのはうれしかったが、土産の方が気になった。雑魚を釣りに行き、雑魚がたくさんぴちぴちとはね、柵を越えそうになると、うれしさのあまり、どなってしまった。

金谷君